



第114号

北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」

2025.1.5

ポーランド「BENE MERITO」名誉勲章 受章！

このたび、安藤厚教授にポーランド共和国外務大臣より「ベネ・メリト」名誉勲章が授与されましたことをここに心よりお慶び申し上げます。授章式は8月8日、札幌市資料館で開かれたワルシャワ蜂起博物館展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」のオープニング記念式典において執り行われました。

安藤教授が2006年より会長を務めておられる北海道ポーランド文化協会は、日本におけるポーランド文化普及のために大変活発な活動を推進しています。このたびの受章をお祝い申し上げますとともに、今後もますます有意義な活動を共にできますよう願ってやみません！（ポーランド広報文化センター）



受章にあたって 安藤 厚

このたびは、栄えある「ベネ・メリト」名誉勲章を頂き、誠に光栄で、深く御礼申し上げます。

この受章は、本協会の活動がポーランド文化の紹介・普及に貢献したと認められたもので、現在および過去の本会会員のみなさま全てと共に感謝し喜びたいと思います。

本会の創立は1987年10月に遡ります。創立の端緒の一つは、ウッチ工科大学学長、ウッチ・ポーランド日本協会会長を務められたイエジー・クロー教授と、当会初代事務局長・吉田宏北海道大学工学部教授との学術上の交流にありました。



=写真= 授章式：来賓・協会のみなさまとともに

協会の発足にあたり、初代会長・今村成和先生（元北海道大学学長）は「北海道」と「文化」に焦点を当てることを強調されました。

初代副会長・遠藤道子先生は当会創立以前に日本シヨパン協会北海道支部設立にも尽力されました。

第二代会長・谷本一之先生（元北海道教育大学学長）は北方少数民族研究者で、1980年代に「ピウスツキのロウ管」から復元されたアイヌ民族の音声資料の分析に参加されました。2013年にポーランド共和国により白老にブロニスワフ・ピウスツキの胸像が建立されて以来、ピウスツキ記念行事は当会の継続的な活動テーマの一つになっています。

そのほか、ポーランドの映画・音楽・文学作品の紹介などが、近年の当会の主な活動分野です。

私どもは会員100人弱の小さな会ですが、これからは当地におけるポーランド文化の紹介と普及に微力を尽くすことをお約束して、お礼のご挨拶とさせていただきます。

（あんどう・あつし、北海道大学名誉教授、会長）

ワルシャワ蜂起80周年記念特別展 札幌市資料館 2024/8/9-30

オープニング記念式典

8月8日、ワルシャワ蜂起博物館特別展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」のオープニング記念式典が催されました。同展ではドイツ占領下のワルシャワ蜂起および戦後復興期のポーランドの首都について語られています。札幌開催は広島、大阪に次いで国内で3番めです。

式典では、ワルシャワ蜂起博物館副館長パヴェウ・ウキェルスキ氏はじめ、ポーランド広報文化センター、北海道、札幌市の来賓の挨拶があり、式典のあと副館長の案内で展示ツアーが行われました。



特別展を観て 石田 レイ子

「ワルシャワ蜂起は最も論争的で、これからのどの時代にも取り上げられ、その一方で決して結論が出ないテーマの一つであろう」ポーランドの歴史学者ガルリツキのこの言葉は長く私の胸に突き刺さっていた。

2018年秋、私の2回目のポーランドへの旅が実現した。その時初めて「ワルシャワ蜂起博物館」(2004年開館)を訪れ(1944年夏のワルシャワ、当時の恐怖、決意、緊張、遺族の慟哭等)を体験し激しい衝撃に圧倒された。その時「この蜂起は正か誤か」「勝利か敗北か」の二元論は成立不可能だと確信した。

今年8月、札幌市での特別展「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」(主催:ワルシャワ蜂起博物館)に駆けつけ、「蜂起はポーランドの歴史の必然」と強く実感した。同時に蜂起終結後の10年間蜂起参加者とその関係者へのソ連の弾圧(不正裁判や差別・迫害)、その犠牲者達の苦悶の姿に言葉を失った。

大通公園に面した広い会場で静かに集中的に蜂起の時系列と市民達の苦悶の姿の精密な説明文、豊富な統計資料、命がけの写真を徹底的に辿ることができた。そのせいか、現在も続くロシアのウクライナ侵攻が私達の思考を締め付けているせいか、2018年の体験と比べて札幌では「蜂起終結後10年のワルシャワとポーランドの生死の接点での歴史的苦難」が最も強く胸の底に刻まれた。私の歴史学習の欠落と空白に後悔するばかりである。

ポーランド国民は共産党政権下のどん底を潜り抜けて1980年代「連帯」運動の勝利を勝ち取り、89年東欧革命の突破口を切り開いた。新たな「ポーランド共和国」の出発は20世紀の歴史的偉業であることは繰り返すまでもない。それは21世紀の世界で希望と平和の開拓を模索しようとする地球市民を絶えず鼓舞して止まない。

頂いた分厚いカタログは、虹の会会員で有り難く共有させていただきました。

(いしだ・れいこ、新潟虹の会会員)

《第113回例会》
朗読会 報告

第13回 午後のポエジア 札幌市資料館 8/18

第13回「午後のポエジア」が「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」展と連携して8月18日に行われた(参加者31人:うち会員11人、ポーランド人6人)。テーマは“語り継ぐ言葉としての、戦争、崩壊、復興、平和”である。

第1部



まず登壇したのは林祥史氏 =左写真=、生誕百年となるズビグニェフ・ヘルベルトの作品「おばあちゃん Babcia」。お婆ちゃんの膝の上で、世界のすべてのことを話してくれる。けれども自分の話はない。大量虐殺のことやアルメニアのことを話さない。呪詛と忌憚を除いた言葉のザラザラの底辺。

次いでムラサキ紫音氏 =次写真左2= は、米倉齊加年作品「おとなになれなかった弟たちへ」を読み上げる。親戚に情報を仕入れに行くと“食べ物はない”と追いつ返される時代。見つけた疎開先には赤ん坊ヒロユキのミルクがない。時々お母さんに黙って舐めていた甘いミルクだけど、彼のたった一つの食べ物。入院した病院で栄養失調で息を引き取った。遺体を背負う母は、爆弾で身体がバラバラにならなくて幸いという。用意されていたお棺に入れようとする小さくて、膝を折り曲げながら、ああ大きくなっていったんだ、と。

村田譲氏 =左6= は竹内浩三作品を紹介する。映画監督になりたかったが兵員不足で大学を強制

的に卒業させられフィリピンへ、23歳で戦死した。作品「冬に死す」「日本が見えない」「ぼくもいくさに征くだけけれど」、そして書きなぐられた6行の絶叫「詩(うた)をやめはしない」と。作品「骨のうたう」一戦死やあわれ とおい異国で ひょんと死ぬるや国のため大君のためと 骨は誉れ高く勲章をもらうけれど 骨を愛する人はなし 骨は粉になり なんにもなしになった―。最後に自分も長生きをしたいとの願い「宇治橋」を渡る。

建部奈津子氏 =右3= は、自ら朝鮮に流れ着きシベリア抑留を体験した神馬文男作品を取り上げた。「知ってるかい」、「短歌で綴るシベリア抑留」の“窓の氷雪花”に“ダモイと指字で溶かす”。ダモイとは家に帰るという意味のロシア語。(次参照)

菅原未榮氏 =左7= は自作詩「幻野〜一升瓶と蜜柑箱」を。蝦夷開拓期一人も欠くことなく子どもを育て正月を迎えた。しかし戦争に負け、爺の危篤の時に一人欠いてしまったのだ、と。

堀きよ美氏 =右7= が大平数子作品「慟哭」を声にする。逝った人は帰らない、生き残った人はどうするといひ、何を分かればいいといひのか。風よお前、世界中を旅するならば、未だ待っていることを伝えておくれ。正義とは剣ではなく愛であると伝えておくれ、と。



第2部

後半では、シルヴィア・オレーヤージュ氏 =右4=がアンナ・シフィルチンスカ作品「バリケードを作りながら」を。銃火の恐怖に人々は恐れる、少年が倒れ恐れの下にバリケードを築く。自分が太陽となれる今に。次いで佐藤レミア氏 =右5= がシフィルチンスカの画像を背景として、ちいさなはっきりとした声を

前へと押し出してくる。

ラファウ・ジェプカ氏 =右1= はタデウシュ・ルジェーヴィチ作品「生きていたものが死んでいった」*を朗読する。死体に卵を産み付ける蠅、死の直前の父の唇と目と、身体が肥大し始める。林檎を売っているサルチャの近くのゲートが炸裂する、林檎が潰れ母が死ぬ。ゲッターに林檎を運ぶものも欲しがるものもいなくなってしまう。

レナタ・シャレック氏 =右6= がチェスワフ・ミウオシュ作品「カンポ・ディ・フィオーリ」*を。この広場でジョルダノ・ブルーノは火焙りとなりやがて人々は酒場へ移動する。思い出すのは壁の向こうのゲッターに砲弾が、そして炎に踊る女の子を笑うのだ。群衆はワルシャワでもローマでも変わりはない。孤独に死するものへの詩人の言葉が反逆を煽る。

(村田譲、運営委員)



知ってるかい 神馬 文男 作
君 知ってるかい
八月十五日のことを
砲声止み銃捨てて
虫たちが合奏した日だよ
突然の玉音放送
直後の特攻出撃
同じ釜の飯を喰った
戦友(とも)が爆弾抱いて
散らされた日だよ
君 知ってるかい
ボクは抱かず散らず
シベリア三悪を
舐めさせられた日だよ
静まりかえった頃
彼の姪が鳴々して
ボクを訪れ
"八月十五日の特攻隊員"に
ペンを走らせた
君こんなこと
誰に何て話せばいいんだ
知ってたら
みんなとボクに教えてほしい

【解説】いま言っておきたいこと 神馬 文男

昭和20年8月15日に太平洋戦争で敗れたことで、日本軍は全占領地域で武装解除され平和が戻り、秋の虫達の喜び合う合奏が聞こえてくるのです。一般兵は軍服を作業衣に銃を鉞に持ちかえるのです。

玉音放送とは、8月15日終戦の正午に天皇が敗戦と再建についてラジオ放送をしたことです。

特記したいことは、玉音放送の5時間後に宇垣長官(海兵40期)率いる海軍機11機と部下23名が十死零生の特攻出撃したことです。岩国で私と同期班(22分隊7

班)の戦友(とも)大木正夫兵曹(福島県出身)が命により爆弾抱いて米艦に体当たり、花と散った日です。私も一歩違うと同じ運命だったと思います。然も終戦後のことです。こんなことを誰に何と話せばいいのでしょうか。

スターリンは日本との中立条約を一方的に破り、8月9日、日本の国土と国民を欲しいままに蹂躪し、そればかりか終戦後の8月23日に日本人(男女少年も含む)を拉致し、シベリアの三悪を舐めさせたのです。私はそれから3年ほどドダゴ第一収容所のテント小屋で生活することになります。



神馬文男氏 19歳頃

短歌で綴るシベリア抑留 神馬 文男 作
採炭の天崩れきて血まみれの
兵眼開きお母と叫べり
シベリア抑留で、スーチャン
地区四十五番炭鉱での死亡
事故。露人は、ノルマ、ノル
マで日本兵を酷使した。
ラーゲルの窓に咲きたる氷雪花
ダモイダモイと指字で溶かす
極寒のラーゲルはテント小
屋だった。ウソのような本当
の話。ダモイが最大の希望で
ある。
特攻を志願せし時送りたる
写真色あせ仏壇にあり
特攻とは特別攻撃隊のこと。
特攻は十死零生である。終戦
近くに私も一歩前に出て志
願した。

* <https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicntn/70/nishi.pdf>

花と散った朋友大木正夫兵曹の姪(道脇紗知さん)が来札して、ともに過ごした予科練時代の彼の足跡を辿りたいとペンを走らせました。紗知さん著の『8月15日の特攻隊員』は光人社 NF 文庫で取り扱っています(2024年8月発行)。

書きたいことはまだまだあります。あんなこと、こんなことを、平和を願いながら命の続く限り書き続けて、あなた方に役立ちたいと願っています。

(じんば・ふみお、生涯学習出前講師、98歳、シベリア抑留体験者、札幌市在住)

第 114 回例会 (どなたもご参加歓迎)



ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会 2025

『イーダ』 Ida 』 2013 | 82分

ポーランド/デンマーク/フランス/イギリス

第 87 回 (2015) アカデミー賞外国語映画賞
ワルシャワ国際映画祭グランプリなど受賞多数



2025. **3/19** (水)

18:30~ 入場無料

札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北8西3)

予約(推奨)お問合せ先 ☎080-4071-0956 (安藤)

✉ hokkaidopolandca@gmail.com



パヴェウ・パヴリコフスキ監督 (1957~)

オックスフォード大学で文学と哲学を専攻、のち英国などでドキュメンタリーを製作、その後劇映画や脚本に進出し欧米で高い評価を受ける。代表作は初めて母国でメガホンを取った本作のほか『イリュージョン』2011、『COLD WAR あの歌、2つの心』2018 カンヌ映画祭監督賞 など



アカデミー賞授賞式で
photo: Lucy Nicholson /
REUTERS / Forum

お話: 坂尻昌平 (さかじり・まさひら) 映画研究者。早稲田大学大学院に学ぶ。共編著『ジャック・タチ』エスクァイアマガジンジャパン 1999、『ジャック・タチの映画宇宙: Jacques Tati』同 2003、『世界映画大事典』日本図書センター 2008、『淡島千景〜女優というプリズム』青弓社 2009、『渋谷実〜巨匠にして異端』水声社 2020

1962年のポーランド。孤児として修道院で育てられた18歳のアンナは、院長から修道女の誓いを立てる前に唯一の肉親である叔母ヴァンダに会うように言われる。ヴァンダを訪ねたアンナは、自分の本名がイーダでユダヤ人であること、亡き両親はどこに埋められているのか分からないことを知らされる。

イーダは出自の秘密を知るためヴァンダと旅に出て、戦時中に両親を匿っていたシモンを訪ねる。ヴァンダは幼い息子を姉でイーダの母であるルージャに預けたが、一家とともに殺されていた。イーダのもとをシモンの息子フェリクスが訪れる。彼は老い先短い父を安らかに眠らせてくれるならルージャらを埋めた場所を教えると約束し、埋葬場所を掘り起こす。そして生まれたばかりでユダヤ人とは気づかれないイーダを神父に託したと告白する。イーダとヴァンダは遺骨を故郷の墓に再埋葬する。

イーダは修道女として生きていかねばならないはずだが、ヴァンダは…。イーダは旅の途中で知り

合ったサクソ奏者の青年リスと再会し2人は結ばれる。リスはイーダに結婚を申し込むが…

第二次大戦中には少数ながらイエドヴァブネ事件(1941)などポーランド人によるユダヤ人虐殺事件があり、スターリン時代末期には自国民を厳しく罰したポーランド女性検察官などがいた。本作はそうした負の歴史に目をつぶらず公平に描いた点に特徴がある。また、モノクロ/スタンダードの洗練された構図と素晴らしい撮影、詩的な映像の水準の高さは息をのむほどだ。台詞や俳優の演技・カメラの動きはミニマルで無駄がない。カトリック、ユダヤ人、ホロコースト、スターリン主義、ジャズというポーランドの特性が見事にマッチした作品といえる。

イーダ役のチュシェブホフスカは演技初経験とは思えぬ見事な演技を見せた。

これは修道院以外知らない少女が旅を通して成長してゆく教養小説でもある。

(池田光良、運営委員)



報告

第 38 回定例総会&懇親会

豊平館 2024/10/12

10月12日(土) 2024年の活動を締めくくるとともに第38回定例総会のあと豊平館2階広間で懇親会が行われ、会員/一般合計38人(うちポーランド人家族11人)が参加する盛会となりました。

昨年は総会・朗読会「午後のポエジア」のあと会食が慌ただしかったので、今年はゆったりと時間をとり中島公園の秋の風情も感じながらの集いでした。

初めは豊平館の重厚な設えの中での音楽鑑賞、会員でバイオリニストの徳田和可さんの演奏、安藤む



つみさんの解説とピアノ伴奏で、ショパン作曲・ミルシテイン編曲「ノクターン第20番 遺作」とモンティ作曲「チャルダッシュ」が披露され、大喝采のアンコールで再び超絶技巧の音色を楽しみました。

会食では、これまでコロナ禍で滞っていた手作り食材の持ち込みを解禁し、札幌在住のポーランド人ご家族のご協力で、代表的なポーランドのお料理やケーキがテーブル狭しと振る舞われました。

つづいて遠く今金からご参加の小篠真琴(越野誠)さんが自作詩「国縫漁港」を朗読。実直な越野さんの

感性と北海道独特の風物に浸りました。

次は恒例のジェプカさんご専門のIT先端技術で回答用端末クリッカーを配り、ポーランドクイズを出題しました。一般常識からポーランド人でも迷う引っかけクイズまで初参加の方もお楽しみいただけました。



最後に赤井川の数井バルバラさんがギターを手にポーランドのバンド曲「マイカ」など2曲を披露しました。



例年、晩秋の趣を豊平館でより深く感じますが、本年は比較的早い日程のため、軽いお運びとなったかと思えます。昨年来この懇親会にもガザ侵攻のニュースが重くのしかかっておりました。来年はすこしでも明るい人道の世界情勢となることを祈ってやみません。

(熊谷敬子、運営委員)

第 38 回定例総会議事録

(議長 佐々木保子)

2024年10月12日(土) 札幌市・豊平館において第38回定例総会を開催し(出席者11人・委任状42通[会員数90人の1/3超=31人])、以下の議案について審議し、各議案とも過半数の賛成を得て議決されました。

[第1号議案] 2024年度(2023.9-2024.8)活動報告について(ラファウ・ジェプカ)

1. 《第37回定例総会》&《第108回例会》第12回朗読会「午後のポエジア」豊平館、2023.10.15(日)1F 下の広間15:30~総会(出席者19人・委任状41通[会員数93人の1/3超=32人])、2F 広間17:30~午後のポエジア(参加者36人[うちポーランド人2人、一般8人])
2. 例会等
 - (1)《第109回例会》特別講演会(トークショー)『カティンの森のヤニナ~独ソ戦の闇に消えた女性飛行士』(河出書房新社 2023.3)~著者:小林文乃氏を迎えて/特別ゲスト:富田武成蹊大学名誉教授、札幌エルプラザ、2023.11.5(日)14:00~16:00、参加者43人(うち会員23人)、アンケート回収17枚、入会2人
 - (2)《第110回例会》ポーランド名作映画ビデオ鑑賞『イレブン・ミニッツ 11 MINUTES』お話し:坂尻昌平氏、札幌エルプラザ、2024.3.9(土)、参加者35人(うち会員11人)、アンケート回収18枚
 - (3)《第111回例会》講演とビデオ上映「カティンの森事件とモンゴル・シベリア抑留」札幌エルプラザ、20

- 24.5.26(日)①講演:井手裕彦「満洲でカティンの森事件に注目していた男~自著『命の嘆願書』より」②お話しとビデオ上映:建部奈津子 No more silence 「無念の想い、俺ら捕虜でねえ」参加者約30人(うち会員11人)、アンケート回収10枚、質問用紙1枚
- (4)《第112回例会》講演と報告とドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』上映~プロニスワフ・ピウスツキのいま~ポーランド・英国におけるアイヌ文化への関心、札幌エルプラザ、2024.6.29(土)①講演:長田佳宏 平取町立二風谷アイヌ文化博物館長「ロンドンで沙流のアイヌ文化を発信する~1910年と2023年の取り組みを主として」②ビデオレター:溝口尚美監督(在ニューヨーク)ワルシャワ上映会から~観客の声:石塚芳明さん(在ワルシャワ);三和昭子さん(在ハルクローヴァ)③『Ainu | ひと』上映、参加者約35人(うち会員11人)、アンケート回収15枚、質問用紙1枚、入会1人
- (5)《第113回例会》第13回朗読会「午後のポエジア」札幌市資料館、2024.8.18(日)13:30~、参加者31人(うち会員11人)〈協力〉①ワルシャワ蜂起博物館 展覧会「ワルシャワ。灰の中から甦る不死鳥」8.9(金)

～30(金)、同展オープニング記念式典、8.8(木)
15:45～※安藤厚会長に「ベネ・メリト BENE MERITO」名誉勲章授与

3. 会誌 POLE4回 no.110+別冊 (2023.9.1)、no.111 (2024.1.5)、no.112 (5.1)、no.113 (8.20) 発行

4. 運営委員会3回①2023.10.2 ②2024.3.18 ③7.8

5. 後援事業等

(1)〈後援〉川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツァ美唄 Vol.IV～小品の森に分け入る～石の声を探し求めて、連弾客演:栢原享子、2023.10.1

(2)〈後援〉日本ショパン協会北海道支部創立50周年記念コンサート～ショパンに魅せられて、札幌コンサートホール Kitara、2024.1.28

(3)〈協力〉さっぽろ雪まつり国際雪像コンクールにポーランド・ヴロツワフ美術大学 ASP Wrocław チームが参加、大通11丁目国際広場、2024.2.3-7

(4)〈協力〉プロニスワフ・ピウスツキ記念行事〈106回忌〉ウポポイ・記念像前、2024.5.17(献花、参加:安藤厚、井上紘一、尾形芳秀)

(5)〈後援〉杜の音楽会～音楽の絵本～美しき五月の調べ、出演:高橋可奈子、鈴木飛鳥、奥井理ギャラリー、2024.5.26

6. 会員動向(2024年度)入会8人:赤木道子、齊藤賢人、齊藤美佳、三田剛己、井手裕彦、建部奈津子、木村-須田廣美、亀山範行

退会11人:新井藤子、野村信史、松山愛羅、松山莞太、松山敏、上田隆弘、土橋芳美、松山敬子、林祥史、三上和子、佐藤清一

会員数92人(休会中2人)(2024.9.1現在)

【第2号議案】2024年度収支決算報告および会計監査報告について(園部真幸・嵩文彦・稲川和幸)別紙参照

【第3号議案】2025年度(2024.9-2025.8)活動計画

について(ラファウ・ジェブカ)

1. 《第38回定例総会》&懇親会、豊平館、2024.10.12(土)
総会1F 下の広間 15:30～、懇親会2F 広間 17:30～

2. 例会等

(1) 午後のポエジア

(2) 名画ビデオ鑑賞会

(3) 講演会等

(4) その他:後援・協力依頼には随時対応

3. 会誌 POLE 2回 no.114 (2025.1)、no.115 (2025.5)

4. 運営委員会:3回程度

5. オンライン広報(HP、Facebook等)の充実

【第4号議案】2025年度予算(案)について(園部真幸)別紙参照

【第5号議案】2025年度役員等(案)について(安藤厚)(会則第6条に基づく役員) 新任

会長:安藤厚

副会長:塚本智宏

運営委員:安藤むつみ、池田光良、小笠原正明、北浦由花里、熊谷敬子、坂田朋優、霜田英麿、園部真幸、中島洋、アグニェシュカ・ポヒワ、村田譲

事務局長:ラファウ・ジェブカ

監査委員:稲川和幸、嵩文彦

(会則第15条に基づく事務局、委員会等)

事務局:(事務局長)ラファウ・ジェブカ、(副事務局長・会計)園部真幸、(催物)安藤むつみ、池田光良、熊谷敬子

編集委員会:安藤厚、池田光良、熊谷敬子、越野誠

広報委員会:安藤厚

(会則第16条に基づく東京事務所)

(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

【第6号議案】その他 なし

2024年度 収支決算書 (自2023年9月1日～至2024年8月31日)

○一般会計
【収入の部】

(単位:円)

	決算	予算	増減	備考
会費	367,500	229,500	138,000	納入率 3千×91人×134% (2024/08入金105千)
寄付金	47,000	50,000	△ 3,000	
雑収入	4	4	0	貯金利子
助成金立替繰入	7,800	0	7,800	
小計	422,304	279,504	142,800	
前年度繰越金	445,896	445,896	0	
合計	868,200	725,400	142,800	

【支出の部】

(単位:円)

	決算	予算	増減	備考
事業費	51,322	100,000	△ 48,678	37総会5.6千、110回例会15.9千、111回例会13千、特別会計事業へ充当6.7千外
連絡費	96,373	55,000	41,373	POLE111-113、バックナンバー発送外
編集費	79,337	70,000	9,337	新刊紹介本9.5千、POLE111号23.3千、112号19.1千、113号19.1千、チラシ印刷外
会合費	20,889	28,000	△ 7,111	運営委員会3回開催に係る賄い費
事務費	34,833	38,000	△ 3,167	用紙、文具、コピー、プリンターインク外
雑費	29,301	15,000	14,301	HP経費7.1千、献花代22千外
予備費	0	419,400	△ 419,400	
小計	312,055	725,400	△ 413,345	
次年度繰越金	556,145	0	556,145	
合計	868,200	725,400	142,800	

○特別会計

【午後のポエジア2023】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター
一般会計より	1,942		
開催経費		51,942	会場使用料4.9千、会食代42千、ピアノ演奏謝礼5千
合計	51,942	51,942	

【「カティンの森のヤニナ」講演会】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター
一般会計より	1,291		
開催経費		43,491	講師謝礼・旅費41.4千、お茶代2千
一般会計へ繰入		7,800	前年度立替分(会場費)一般会計へ繰入
合計	51,291	51,291	

【「Ainuひと」上映会】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター
一般会計より	3,000		
開催経費		53,000	会場使用料18千、ビデオレター制作費20千、講師謝礼15千
合計	53,000	53,000	

【午後のポエジア2024】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備考
助成金	50,000		ポーランド広報文化センター
一般会計より	508		
開催経費		50,508	会場使用料9.9千、講師交通費10千、茶菓子代6.6千外
合計	50,508	50,508	

【演奏部会基金】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備考
前年度繰越金	267,973		
利息	2		
合計	267,975	0	

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2024年9月27日

監査委員

嵩文彦

2024年9月27日

監査委員

稲川和幸

2025年度 収支予算 (自2024年9月1日～至2025年8月31日)

(単位：円)

【収入の部】	予算	前年度決算	増減	23年度決算	備考
会費	129,500	367,500	△ 238,000	256,000	3千×90人×85%-10万
寄付金	50,000	47,000	3,000	64,860	
雑収入	4	4	0	4,159	貯金利子
助成金立替繰入		7,800	△ 7,800		
小計	179,504	422,304	△ 242,800	325,019	
前年度繰越金	556,145	445,896	110,249	588,316	
合計	735,649	868,200	△ 132,551	913,335	
【支出の部】					
事業費	100,000	51,322	48,678	123,429	38総会4万、例会4回×1.5万
連絡費	100,000	96,373	3,627	107,201	ポーレ発送等(3万×2号)、その他郵送4万
編集費	70,000	79,337	△ 9,337	143,943	ポーレ(2万×2号)、チラシ・配布資料等3万
会合費	21,000	20,889	111	15,045	運営委員会(7千×3回)
事務費	49,000	34,833	14,167	63,411	用紙、文具、コピー、プリンターインク外
雑費	22,000	29,301	△ 7,301	14,410	HP経費外
予備費	373,649	0	373,649	0	
小計	735,649	312,055	423,594	467,439	
次年度繰越金	0	556,145	△ 556,145	445,896	
合計	735,649	868,200	△ 132,551	913,335	

○特別会計【演奏部会基金】

前年度繰越金	267,975				
--------	---------	--	--	--	--



新刊
紹介

『迷子の魂』『個性的な人』

オルガ・トカルチュク(文) ヨアンナ・コンセホ(絵) 小椋彩(訳)

岩波書店 2020.11 / 2024.7



ポーランドで生まれ、このたび小椋彩さんの翻訳で岩波書店から刊行された二冊の絵本『迷子の魂』と『個性的な人』には、オルガ・トカルチュク文、ヨアンナ・コンセホ絵と記されているが、特に前者では、最初にほんの二行ほどと、その少し先に一ページびっしりの文があるだけで、あとはひたすら絵が語る展開となる。

人のいないベンチ、がらんとした店、汽車の窓から外をながめる子ども…… じっと椅子にすわって、どこかへ消え去った自分の魂がもどってくるのを待つ男の髪は、次第に長くのびていき、モノクロの光景のなかで、男がひざにかかえた鉢の、ゼラニウムらしき植物だけが、緑の葉をぐんぐんひろげる。窓からそれをのぞく子ども。次の見開きで、髭もじゃになった男と、おかっぱ頭の子どもとが、美しい緑の葉越しに見つめあう顔の、美しいこと。そのあと、二人が並んで腰かけている絵も、静かで、暖かくて、忘れがたい。最後は、空高く枝をひろげるゼラニウムの下に、ぽつんと建った赤い屋根の家があるだけの光景だ。よく見ると、家の近くに、ルーペがないと見逃しそうな、小さな赤い椅子が二つ。男と魂は、いつもここでお茶を楽しむことになるのだろう。

『迷子の魂』は幸せに終わるが、『個性的な人』のほうは、かなり不穏だ。最初のうちは、赤ちゃんを抱く母親、幼児をはさんでしゃがむ夫婦などの、幸せそうな家族写真ばかり。それがしばらく続いて本文になると、個性的な顔で絵のモデルになり、コマーシャルにも出演した少年のうれしげな顔が、眩しい逆光に半分隠されて、クローズアップされる。だが、そのあと、寄せ集めのように続く写真には、うし

ろ姿や、鏡に、もやっと映った顔や、彼が見たらしい、世界各地の景色があるばかりだ。

終わり近くの、左右から折り畳まれているページを開いてみると、大きな絵があるのかと思いきや、あるのは字ばかりで、男の顔がスマホで自撮りをするたびに薄れていき、もやもやしたシミになり果てたいきさつが語られていた。そのあと彼は、新しい顔を不法に入手するすべを知るのだが…… という展開で、こちらは、「お楽しみください」とお勧めしていかどうか、ちょっとためらってしまうが、モノクロとカラーとをとりまぜた絵の見事さは、たいしたものだ。日本の夜の街を走るバスの絵、そのおむかひのページにある、何本もの筋になってガラス窓を伝う雨水越しに見る町の風景など、その場所、その時間に、迷いこんだような気にさせられる。

絵本ではあるが、どちらも、明らかに大人のためのもの——生きることにくたびれて、一人になった大人が、『迷子の魂』の男のように、ひよいとやってきた見知らぬ少女と語りあえるようになるには、どう生きていけばいいのか、それを思ってみる、ありがたい糸口になりそうだ。背表紙を、わざと傷んでいるかのように見せているデザインも、心憎い。

(脇明子、ノートルダム清心女子大学名誉教授)

『個性的な人』は、オルガ・トカルチュク文、ヨアンナ・コンセホ絵による絵本の第2作です。

主人公は個性的な顔立ちを持ち SNS で自身の情報を発信していますが、ある日、自分の顔が少しぼやけていることに気づきます。誰かが彼の情報画面をタップする度に顔がぼやけていき、ついに無くなってしまいます。不安に襲われた彼はある行動に出ますが、多大な犠牲を払って顔を手に入れた後、戦慄するような状況に会い、最後に不気味な言葉をかけられます。SNS などの過剰で不確かなネット情報に翻弄されている中、個性が失われていくという問題を投げかけた大人向けの絵本です。

この絵本では、文章はある部分に集中していて、ほかのページはちょっとした言葉のかけらだけ、あるいは全く絵だけで、その世界に浸っていくように各場面が展開されています。まるで著者の「文学のように」言葉の間を存在と時間を越えた第4の視点で見つめ

ているように描かれています。著者と画家の間の深い信頼ゆえにこのような表現が可能なのでしょう。

前作『迷子の魂』でも行間を紡ぐように静かに場面が描かれています。ただ、本作の不安が残る結末とは対照的に、「ゆっくり」自分を待つことで最後に自分の魂と出会います。

「文学のように」と書きましたが、現在の SNS のように真の情報が見えにくい状況に対し文学のもたらす可能性について、著者はノーベル賞講演『優しい語り手』*の中で次のように語っています。

「文学は登場人物の内面での理由づけや動機づけに焦点を当て、別の人には触れることのできない経験を明らかにし、心理的な解



積の中へ読者を駆り立てます。文学だけがわたしたちを他者の生活の中に深く立ち入らせ、その理由を理解させ、感情を共有し、運命を体験させることができるのです」(拙訳)文学がもたらす個性の認識への期待を感じさせる言葉です。

本作も含めて、小椋彩さんの訳は、著者の世界観や背景(中欧文学の存在、第4の視点)なども踏まえ、詳細な下調べのもと、丁寧に、張り詰めた空気

感を歪めることなく淡々と表しています。ときおり著者の遊び心も織り交ぜながら。

『個性的な人』に出会った方は前作『迷子の魂』もぜひ合わせて読んでみてください。自分を見失いがちな情報過多の現在、文学的な絵本であるこの二篇は、情報の嵐の中で自分を取り戻すために大切なことを気づかせてくれると思います。

(住谷秀保、茨城大学工学部元教員、PJATK 短期専門家)

『ヘルベルト詩集』

ズビグニェフ・ヘルベルト(著) 関口時正(編/訳/解説) 未知谷 2024.10

関口時正氏の彫心鏤骨の訳業になる佳麗な訳詩集。訳者は自ら表紙・カヴァーの装丁に関わっている。9本ある詩集の初版の出版年の順に、各詩集から精選された91編の詩が並ぶ。難解なそれらの詩を読み解く糸口を探してみた。



〈ヘルメス〉詩人はヘルメスを「わが守護神」と呼んで、自身をヘルメスに擬している。第二詩集『ヘルメスと犬と星』に同じ題名の詩がある。「ヘルメスが世界をゆく。犬に出逢う」「私は神です」と礼儀正しく身分を明かし、犬に挨拶する。犬は冥界の番犬ケルベロスであろう。犬はヘルメスの手を舐め、彼を受け入れる。二者は星に出逢う。星はアフロディテであろう。三者は世界の果てまで旅に出る。

ヘルメスは「神々の使者」であり、死者の靈魂を冥界に導く「魂の導者」である。翼のあるサンダルを履き、翼をもつ帽子を被ったヘルメスは天界・下界・冥界の間を自由に行き来する。そして何よりも神々をも欺く智者である。その叡智をもって詩人は、ギリシャ神話・オリエント神話・旧約聖書の伝説あるいは古典文学の主人公たちの引喩を織り交ぜて彼の生きた時代・社会の風潮を批判する。

たとえば「天使の取調べ」は固有名詞を記さずにスターリンの肅清政治を痛烈に批判した詩と読める。検閲者の目を欺く詩人の叡智である。

〈単独者〉『コギト氏』はヘルベルトの分身である。デカルトの「われ思う、ゆえにわれ在り Cogito, ergo sum」に由来する。しかしヘルベルトはデカルト的であるよりもパスカル的人間であるように思える。ロシア出身の実存哲学者ベルジャーエフは「根源的なのは(われ)であり、それは何ものからも導き出されず、他の何ものにも還元されえない」とデカルトの前提を誤謬とし、「われが実存する、ゆえにわれは思惟する」のだ、と主張する(『孤独と愛と社会』氷上英廣訳)。思惟に先立って実存する人間は「傷める葦」であるが、それは「考える葦」である(パスカル)。

コギト氏は日々思考する。「僕の中には思考する炎がある」(『銘』)。ヘルベルトはソ連型の教条的社

会主義もナチズムも同質的なものと観て全体主義を憎悪した。その両者に支配された時代のポーランドを彼は単独者として生き抜いた。

〈魂の故郷〉ヘルベルトの実存の根源は彼の故郷の町ルヴフ Lwów (現在はウクライナ領リヴィウ)にある。18世紀にポーランドが分割されオーストリア領となった時代には Lemberg と呼ばれガリツィアの首都であり、大学、ギムナジウムがあり古典主義的な教育がなされた。第一次大戦後ポーランド領となったが、第二次世界大戦でナチスドイツに占領され、戦後ソ連領となった。

ヘルベルトはドイツ占領下、地下大学で教育を受けた。ナチスとソ連に支配され多くの市民が殺害され家を失ったルヴフの運命は、ポーランドのそれと同じであった。ルヴフの町もポーランドも彼には帰ることができない失われた永遠のふるさとだった。故郷の町に「唯一残ったものと言えど／チョコクで円を描いた／舗道の板石／私はその中心に立つ／一本の足で／跳躍の一瞬前」(『故郷の町に帰ることを考えるコギト氏』)。

ヘルベルトの詩には「一本足で」という語句が何度か登場する。少年時代右足を骨折し、健全なのは片足だけであることを解説によって知った。しかし彼は一本足で跳躍し、飛翔する。「片足立ちの神」イアソンの神話を意識していたとも思える。

「接続法の魅力を欠いた統語法」を軽蔑し(『趣味の力』)、主節と従属節とが有機的にしっかりと結合された完全な複合文を志向した(『日禱』) ヘルベルトは、自分の詩には句読点を用いていない。

ポーランド語の達人、関口時正にしかできない訳業である。(栗原成郎、東京大学名誉教授、会員)

アイヌ民族の世界観と「ひと」の役割について考える 溝口 尚美



1. 映画が海を越えて繋げた「ひと」

平取町と私が協働制作したドキュメンタリー映画『Ainu | ひと』の上映会が北海道ポーランド文化協会の主催で2024年6月末に札幌で行われました。前年にワルシャワで開催された映画祭 “In Our Own Words” で本作が上映されたご縁でポーランド在住の日本人の方々と繋がり、私が住むアメリカとポーランドを結んでオンラインで行った対話を録画・編集し、札幌の上映会で来場者にシェアして頂きました。

マイクロバジェットで自主制作した映画がこのように世界の人たちを繋ぐ役割をしていることに映像作家として感慨を覚えます。全ては主人公の古老4人と平取町のアイヌ文化継承に携わる人々の熱意、そして関係者の協力なしには実現しなかった事でした。映画制作と上映に関わって下さった全ての皆さんに心より御礼申し上げます。

2. ロンドンで感じた「ひと」の熱

2023年秋～24年春にかけてロンドンの Japan House で “Ainu Stories: Contemporary Lives by the Saru River” が開催されました。「沙流川流域の現代のアイヌ文化」をテーマにした約5カ月に亘る展示に加え、平取町でアイヌ文化継承に関わる人たちがロンドンに行って、踊り・言語・食・手仕事などを紹介する機会も設けられました。故・萱野茂さんが出演する短編映画や拙作も上映され、様々な視点からアイヌを知るこのイベントは大盛況に終わりました。私は2月に古式舞踊と食が披露される時に、ロンドンに飛びました。

昨今「ゴールデンカムイ」が世界中で人気となり、アイヌへの関心が高まっています。一方で、ナマの伝統文化に触れる機会はなかなかありません。ロンドンでは、若い世代も加わって平取の人たちが生き生きと舞台に立つ姿を見て心から感動し、実際に「ひとの熱」を感じられる対面イベントの意義を強く感じました。

そして、私が住むニューヨークでも「アイヌ文化を

紹介する対面イベントをしたい」という夢が生まれました。実現は簡単ではありませんが、最大限の努力をしたいと思います。日本各地でも同じようなイベントが行われる事を願っています。

3. 「ひと」の役割

Ainu はアイヌ語で人間を意味します。『Ainu | ひと』の映画の冒頭ではアイヌ語と日本語を併記して森・川・月・鳥・虫などをモンタージュし、最後にメインタイトルに繋げました。アイヌ民族の考え方では、人種や性別に関わらず人間は全て Ainu なのです。

今、地球では気候変動により、深刻な環境問題が発生しています。そして、人種や土地を要因に人間同士が殺し合う醜い戦争や紛争が起こっています。拙作の主人公の一人、故・鍋澤保さんは、土地を「どこからどこまでが誰のもの」と境界線を作る考え方はアイヌ民族にはなく、全ての生き物が自然界の物を共有し、必要な物を必要な量だけ頂くんだ、と私に話して下さいました。

私がこれまで知り合った南米の先住民族にもアイヌ民族と同じ考え方があります。コロンビアの Nasa はナサ語で人間。エクアドルの Waorani はワオラニ語で人間。地球の真裏の先住民族が同じように自分達を人間と名付けた事は偶然ではないと感じます。

IT 技術が発達し、現代の私たちは地球のどこにいても容易に顔を見ながらオンラインでコミュニケーションができるようになり、「ひと」は素晴らしい技術を作りました。一方で、社会の状況を悪化させているのも「ひと」です。そして、これらの状況を変えていくのは、私たち「ひと」次第です。

平和で豊かな国に暮らしデジタルデバイスにどっぷり漬かる日常生活への自省も込めて、大きな視野で森羅万象の中の人間としての役割を考えながら生きていきたいと思います。

(みぞぐち・なおみ、映像作家)

グラジナ・バツェヴィチの生涯と作曲スタイル 徳田 貴子

前回 POLE113 号では、グラジナ・バツェヴィチのピアノ・ソナタ第1番と第2番についてご紹介しました。今回は、彼女の生涯と作曲スタイルについて詳しく述べます。

キャリア形成期

バツェヴィチ（1909～69）は幼少の頃から父の手ほどきを受けヴァイオリンとピアノにおいて音楽的才

能を現した。1928～32年までワルシャワ音楽院でヴァイオリンと作曲を専攻したあと、パリに留学しナディア・ブーランジェのもとで勉強を続ける。留学中の作品にはパリの作曲コンク



ルで優勝した木管五重奏などがあり頭角を現した。

彼女の作曲スタイルは基本的に新古典主義に分類される。古典主義は1930年代のパリにおいて「新音楽」としてストラヴィンスキーやプロコフィエフを中心に流行となっていた。バツェヴィチもそれに応えて新古典主義にポーランドの民族的要素を取り入れた作曲スタイルを確立させていった。

帰国後、ポーランド国立放送交響楽団に首席ヴァイオリニストとして入団、自らのヴァイオリン協奏曲第1番を初演することになった。彼女は作曲家と演奏家という二足の草鞋を履く多忙な生活を送るようになった。

社会主義リアリズムによる統制のもとで

第二次世界大戦のあいだバツェヴィチは家族と共に地方を点々と避難し、終戦後ワルシャワに戻った。しかし、戦争の終結は自由と平和を意味しなかった。ポーランドに政治的激動の時代が訪れた。鉄のカーテンが降ろされ（1946）、ソ連の統制を受ける東欧は西欧から分断されてしまった。

ポーランド音楽界も西ヨーロッパの前衛的な音楽の動きから切り離され、さらにソ連は文化上の影響力をより強固なものとするため、自国で芸術の指針とされていた「社会主義リアリズム」の統制をポーランドを含む衛星諸国へも押し付けるようになった。音楽分野でも「大衆が理解しやすく、民族的なスタイルを持つ音楽」こそが社会主義リアリズムに則っているとされ、ポーランドの作曲家たちは伝統的な民族音楽を用いて聴衆にわかりやすい音楽を作ることを強制された。

このような時期にも、バツェヴィチは作曲の手を緩めず、むしろピアノ協奏曲（1949）などのちに代表作となる作品を作曲し続けた。また、ワルシャワ市の賞など主要な賞を継続的に受賞して名声を得た。昨年10月に筆者が日本初演したピアノ・ソナタ第1番や、第2番もこの時期に作曲された。

キャリア後期～「ワルシャワの秋」音楽祭以降

1953年のスターリンの死後、ポーランドも次第にソ連の文化政策の押し付けから解放されていく。「ワルシャワの秋」と名づけられた現代音楽祭が定期的開催されるようになり、第1回音楽祭（1956）ではシェーンベルクなど西側の作品が発表された。これをきっかけにポーランド音楽界でも前衛的な技法を用いた作品が相次いで発表され、音楽的な「雪解け」が急速に進んでいることを印象づけた（このあたりの経緯はグヴィズダランカ著『現代ポーランド音楽の100年』57頁以下に詳しい）。音楽界の前衛化の傾向にバツェヴィチも応えようとした。1956年に書かれたピアノのための作品「10の練習曲」では民謡から離れ、拡張された強弱やテクスチャが表現されている。

1960年代に入って、バツェヴィチはポーランド作曲家協会副理事長などの重要な地位に就くようになり、作曲活動は緩やかになった。1966年には国立高等音楽学校（現ショパン音楽大学）の作曲の教授に就任し、首都の音楽大学で要職に就いた初めての女性となった。1968年、ポーランド作曲家協会を代表してアルメニアの音楽祭に出席した旅先でアジア風邪にかかり、1969年1月、若くして帰らぬ人となった。

バツェヴィチの作品が世界的に再評価が進んでいるのは、困難な時代にも妥協せず作曲し続けたからであろう。彼女が兄に宛てた手紙には「作曲家は自身が満足ゆくまで、正直に作曲しなければならない」という言葉が残されている。自身の内なる声に忠実であり続けたグラジナ・バツェヴィチの作品は、これからは私たちに魅了し続けるだろう。
（とくだ・たかこ、ピアニスト、会員）
=写真= 公園で寛ぐグラジナ・バツェヴィチ（1960）撮影：Andrzej Zborski, 提供：Joanna Sendlak



在札幌ポーランド人コミュニティ水曜会千回の集い ラファウ・ジェプカ

2024年7月17日、札幌に住むポーランド人は、毎週恒例の水曜会の記念すべき千回目を迎えました。この伝統は2001年に妻のエディタが水曜の午前にポーランド語の授業をはじめたときから始まりました。

千回目にはもっと早く到達する筈でしたが、コロナ禍で会は長い間中断されました。パンデミック後、私たちは集まる場所を北大中央食堂から向かいに新たに建設されたセイコーマート2階の席に移しました。天気が良ければ屋外のテラスも利用できます。

水曜日には北大に来られない人もいるため、2日

後の金曜夜により多くのメンバーで千回目をお祝いしました。今回は5百回目の時のような盛大なイベントではありませんでしたが、パヴェウ・ミレフスキ大使から祝辞をいただき、在札幌ポーランド人コミュニティ全員を代表して心から感謝申し上げます。

ここ数年、札幌のポーランド人の数は少し減りました。その理由の一つは、コロナ禍が学生や研究者の流入を妨げたことです。しかし、状況は徐々に改善しています。千回記念の写真 =次頁= には、若手研究員として滞在中の2人と、ワーキングホリデービザで

札幌に来た1人が写っています。また、以前は学校の関係で参加できなかった私たちの子どもたちも、この特別な会に加わることができました。



が縮まっても、顔を合わせる毎週の集まりは私たちの海外生活にとって非常に貴重な機会です。水曜会の伝統が新世代のポーランド人たちにより、さらに2千回、2043年ま

次は2034年夏に私たちが1500回目のランチを共にすることを楽しみにしています。その頃、私は定年を間近に控え、水曜会のおかげで素晴らしい人々と出会い友情を築けたことに感謝しているでしょう。この特別な機会に、日本全国に散らばる元札幌ポーランド人コミュニティの皆さんが札幌に集まり、新幹線で訪れることもできるかもしれません。

1996年に初めて札幌駅に降り立ったとき、人生の大半をこの素晴らしい街で過ごすことになるとは思いませんでした。インターネットの普及で母国との距離

でも続くことを願っています。

最後に、私たちのコミュニティを常に支援して下さった故富山信夫さんはじめ北海道ポーランド文化協会の皆さまに深く感謝申し上げます。(Rafał Rzepka, 北海道大学大学院情報科学研究院准教授、事務局長)
=写真= 千回目の会：左からミハウ・マズル, シルヴィア・オレーヤージュ, マチエイ・ピエイコ, スザンナ・ガイダ, 恵李アンナ・河村, パヴェウ・モティカ, アグニェシユカ・ポヒワ, エディタ/ラファウ/ミコワイ・ジェプカ



会員動向 (2024.8~2025.1)

入会: 引田秋生、坂尻昌平、樋口みな子 (敬称略)

ご寄付 (2024.8~12) 深謝!

(1口千円) (7) 齊藤賢人、齊藤美佳 (3) 三上和子 (2) 安藤厚、安藤むつみ、安藤瞬 (1) 林祥史、小林浩子、佐藤晃一

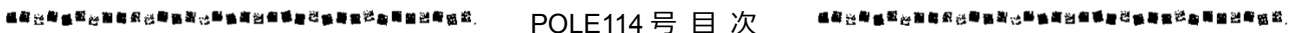
年会費 (2024.9~2025.8) 納入のお願い

年会費の納入をよろしくお願い申し上げます。

年会費: 一般3,000円、学生1,500円 また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります。

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

- ◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会
(他銀行からの送金の場合) 店番 (279) 預金種目 (当座) 店名 (二七九[ニナナキユウ]店) 口座番号 (0019735)
- ◇北洋銀行(本店営業部) 普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドペンカキョウカイ ※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料
- ※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください



POLE114 号 目 次

ポーランド「BENE MERITO」名誉勲章 受章! 受章にあたって (ポーランド広報文化センター、安藤厚)

ワルシャワ蜂起80周年記念特別展 オープニング記念式典.....	1
特別展を観て(石田レイ子)、報告《第113回例会》第13回「午後のポエジア」(村田譲、神馬文男).....	2
《第114回例会》ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2025『イーダ』(池田光良).....	4
報告《第38回定例総会&懇親会》、総会議事録(熊谷敬子、佐々木保子).....	5
〈新刊紹介〉『迷子の魂』『個人的な人』(脇明子、住谷秀保)『ヘルベルト詩集』(栗原成郎).....	8
アイヌ民族の世界観と「ひと」の役割について考える(溝口尚美)	
グラジナ・バツェヴィチの生涯と作曲スタイル(徳田貴子).....	10
在札幌ポーランド人コミュニティ水曜会千回の集い(ラファウ・ジェプカ).....	11

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834, hokkaidopolandca@gmail.com	安藤厚/池田光良 熊谷敬子/越野誠
	東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	

POLE no.114 (January 2025)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Professor A. Ando was awarded the "BENE MERITO" Order of Honor (Instytut Polski w Tokio, A. Ando), Opening ceremony of the Warsaw Rising Museum Exhibition "Warsaw. Phoenix from the Ashes"	1
Impressions of the Warsaw Rising Exhibition (R. Ishida)	
Report: 13 th "Afternoon Poesia" 8/18/2024 (J. Murata, F. Jimba)	2
Announcement: Video viewing of Polish masterpiece movies 2025 "Ida" directed by Pawel Pawlikowski 3/19/2025 (M. Ikeda)	4
Report: 38 th Annual Meeting & Reception, Records of the 38 th Annual Meeting 10/12/2024 (K. Kumagai, Y. Sasaki)	5
Book Review: "Zgubiona dusza" & "Pan Wyrazisty" by Olga Tokarczuk (A. Waki, H. Sumiya), "Wiersze Zbigniewa Herberta" translated by T. Sekiguchi (S. Kurihara)	8
Essay: On the Ainu people's worldview and the role of the "human being" (N. Mizoguchi), The life and work of Grazina Bacewicz (T. Tokuda)	10
The 1000 th Wednesday Luncheon Meeting of the Polish Community in Sapporo (R. Rzepka)	11